

Macbeth における死生観

Ideas of the Afterlife in *Macbeth*

山畑 淳子

YAMAHATA Atsuko

Macbeth is a subtle and profound tragic play, containing a very modern essence. The objective of this paper is to probe this ambiguous, peculiar essence through careful examination of Shakespeare's ideas of the afterlife in *Macbeth*. In this play, the protagonist Macbeth encounters the mysterious three sisters and he is affected by the equivocal words of the apparition. In murdering Duncan, Macbeth agonizes over his decision, and he loses his self-control and mind. Through his deep skepticism, he drives himself into a frenzy and shows self-destructiveness. By comparing Macbeth's idea of the afterlife with those of other main characters, we examine Macbeth's thoughts on the afterlife. His peculiar idea about the afterlife becomes apparent in his reaction to the report of Lady Macbeth's untimely death.

The purpose of this paper is to consider Shakespeare's ideas of the afterlife in *Macbeth*. By looking into the play through a careful examination of the structure and an analysis of the imagery, this paper discusses Shakespeare's thoughts about the afterlife in the Jacobean flow of his dramaturgy.

I

Macbeth は繊細でとらえがたく、奥深い悲劇であり、非常に現代的な要素がある。こうした *Macbeth* の作品の中の不透明で特異な要素を、主要登場人物の死生観を通して探ってゆきたいというのが、本稿のねらいである。この作品の中に現れる *Macbeth* の死生観はどのようなもの

で、それは、他の悲劇の主人公の死生観とどう違うのか、また、この作品における死生観が演劇史の中でどのような意味を持つのであろうか。**Macbeth** の死生観、あるいは生き方は、**Macbeth** 夫人や **Cleopatra** あるいは魔女たちの考え方とどう違っているのであろうか、そして **Macbeth** の生き方や死生観は、どのように変容していくのであろうか。**Macbeth** 夫人の訃報の知らせを受けた **Macbeth** の有名な独白には、**Macbeth** 独特の死生観が表現されている。台詞を丁寧に追うことにより、**Macbeth** と夫人の罪の意識と死生観を探るのが本稿のねらいであり、**Macbeth** の死生観および思考は自然の中に含有されるものであるのか、それを越えるものであるのかといった自然との関わりについても考察してゆきたい。

本稿では **Shakespeare** 後期の作品、**Macbeth** における死生観とその特異性について考察し、これらが一体どこへ向かってどのように変容していくのかについて、**James** 朝の演劇におけるドラマツルギーの大きな流れの中で考えてゆきたい。

II

Terry Eagleton は、どんなに批評が魔女たちをおとしめようと、どんなにこの劇がその事実を認識していなくとも、魔女たちはこの作品のヒロインであるとしているが、**Macbeth** にとって、内なる野心の表れ、心の中にある表象が魔女であるとすれば、これは批評家の比喻ではあるが、強ちはずれている意見とは言えないであろう。¹ **Macbeth** にとって、魔女たちの予言に茫然となり、身内であり、忠誠をささげるべき **Duncan** 王を暗殺する決心は、いつなされたのであろうか。また、**G. K. Hunter** は、**Macbeth** 夫人に提案されたように行動する理由が **Macbeth** にはないとも、指摘している。² この作品が現代的なのは、本来 **Macbeth** には国王への恨みがあるわけでもなく、**Macbeth** には、武勇もこの上なく認められ、そこそこ満足のいく地位にあり、3人の魔女の予言や夫人の教唆がなければ、自ら主体的に国王弑逆には関わる必要はないのに、悪循環に巻き込まれていくプロセスが見られるためである。このあたりの **Macbeth** の苦悩と葛藤、**Duncan** 殺害に至る経緯を探ってゆきたい。

まず、第1幕第3場で、運命を預かるこの世の者とは思われぬ3人の魔女から、雷鳴轟く広野で、グラームスの領主と呼びかけられ、コーダーの領主、そして未来の国王になると運命を予言された **Macbeth** は茫然とし、予言をして空中に消えた魔女たちにもっと側にいてほしかったと望み、次のように、傍白している。

Macb. [Aside.] Two truths are told,
 As happy prologues to the swelling act
 Of the imperial theme.—I thank you, gentlemen.—
 [Aside.] This supernatural soliciting
 Cannot be ill; cannot be good:—
 If ill, why hath it given me earnest of success,
 Commencing in a truth? I am Thane of Cawdor:
 If good, why do I yield to that suggestion
 Whose horrid image doth unfix my hair,
 And make my seated heart knock at my ribs,
 Against the use of nature? Present fears
 Are less than horrible imaginings.
 My thought, whose murther yet is but fantastical,
 Shakes so my single state of man,
 That function is smother'd in surmise,
 And nothing is, but what is not. (I. iii. 127-42)³

思いもかけず、魔女の予言通り、コーダーの領主になった Macbeth は、この運命の展開を「自然ならざる誘い」と捉え、それを悪いはずもなく、良いはずもないと率直に述べている。そして、国王弑逆の恐ろしいイメージに髪の毛が総毛立ち心臓が激しく鼓動し、肋骨にぶつかるようだと言っており、ここで既に国王殺しを、五感を使ってイメージしている。しかし、この引用箇所では、理性に基づいた綿密な国王弑逆の計画ではなく、殺人を想像しただけでも、体ががたつき、五感の動きが止まってしまう、現実の恐怖など大したことはないくらい恐ろしい想像であり、実在しないもの以外は何もないと述べている。ここでの Macbeth はまだ、物の存在や意味、実在が考えられる理性的な一面を持っており、その過程で恐ろしい思いを否定しながらも、存在するのは、ありはしないものだけと、国王殺害の意図をこの頃から悩みながらも考えている。芝居のメタファーで今後のプロットを概説し、その芝居の主題は王になることであると明言している。この簡潔な芝居においても、*Hamlet* と同様、生き方に関する考察は死生観や演劇論と結びついて述べられている。さらに、“If Chance will have me King, why, Chance may crown me, / Without my stir.” (I. iii. 144-45) と傍白し、この時点では、自ら動くことは考えていないが、“Come what come may, / Time and the hour runs through the roughest day.” (I. iii. 147-48) と述べ、嵐の中に身を投じる覚悟は出来ている。

Macbeth に多大な報酬と称賛の言葉を与えてくれた Duncan は、王位継承者を長男 Malcolm と定め、カンバーランド皇太子と呼ぶ宣言をするのであるが、この期待外れな宣言に対して、

Macbeth は次のように傍白している。

Macb. [Aside.] The Prince of Cumberland!—That is a step
On which I must fall down, or else o’erleap,
For in my way it lies. Stars, hide your fires!
Let not light see my black and deep desires;
The eye wink at the hand; yet let that be,
Which the eye fears, when it is done, to see. (I. iv. 48-53)

Macbeth の成功の行く手をはばむ障害物となるこの一段を転げ落ちるか、跳び越えるかを思案し、胸の奥深くの暗い野望を星々に照らし出すなど述べている。迷いはあるものの、跳び越えたい願望が同居し、やるとなったら、目も恐れて見たがらないことをやるのだと傍白している。五感の表現を使い、目に手の動きに瞼を閉じよと命じ、国王弑逆の心づもりを熟慮の判断に委ねないよう呼びかけている。Macbeth 自身、事がなされてしまえば、目も怖がって見ないだろうと述べているように、国王殺害を邪悪な事と考え、この段階では、Macbeth の中に迷いはあるものの、やるとなったら、この行為をやらざるをえないとは考えている。

Macbeth が国王弑逆の計画を実行に移すには、魔女の予言のほかに力強いひと押しが必要であるが、このあたりの Macbeth と Macbeth 夫人のやりとりについて見てゆこう。Macbeth 夫人は、劇冒頭で示された武勇のイメージの Macbeth とは違う一面を “Yet do I fear thy nature: / It is too full o’th’ milk of human kindness, / To catch the nearest way.” (I. v. 16-18) と述べ、心配している。ここで、夫人の気にする “human kindness” とは、Penguin 版によると、“humanity” のことで、個人を人間社会の秩序に結び付けるもののことであり、夫人は Macbeth の人間性を重んじる、優しく、すぐに怖がる面を強調し、怖れている。⁴ 社会の秩序を重んじれば、目の前に栄光が輝いていても、躊躇し、飛び越せなくなってしまうからであり、弑逆前も Macbeth は、夫人が危惧するように、まさにそのように理性と野望のあいだで躊躇している。

夫人から世間を欺くには、世間と同じ顔をするように、歓迎の気持ちを表すよう、教唆された Macbeth は、Duncan 王をもてなす宴会の席を1人離れて、次のように内的独白をし、国王弑逆について考え、死生観についても触れている。

Macb. If it were done, when’tis done, then ’twere well
It were done quickly: if th’assassination
Could trammel up the consequence, and catch
With his surcease success; that but this blow

Might be the be-all and the end-all—here,
 But here, upon this bank and shoal of time,
 We'd jump the life to come.—But in these cases,
 We still have judgment here; that we but teach
 Bloody instructions, which, being taught, return
 To plague th'inventor: this even-handed Justice
 Commends th'ingredience of our poison'd chalice
 To our own lips. He's here in double trust:
 First, as I am his kinsman and his subject,
 Strong both against the deed; then, as his host,
 Who should against his murderer shut the door,
 Not bear the knife myself. Besides, this Duncan
 Hath borne his faculties so meek, hath been
 So clear in his great office, that his virtues
 Will plead like angels, trumpet-tongu'd, against
 The deep damnation of his taking-off;
 And Pity, like a naked new-born babe,
 Striding the blast, or heaven's Cherubins, hors'd
 Upon the sightless couriers of the air,
 Shall blow the horrid deed in every eye,
 That tears shall drown the wind.—I have no spur
 To prick the sides of my intent, but only
 Vaulting ambition, which o'erleaps itself
 And falls on th'other— (I. vii. 1-28)

Macbeth は独白の始めの部分では、やってしまってそれで終わりになるなら、暗殺という網で結果をからめとることができるなら、彼を亡き者にして成功がつかめるなら、さっさとやってしまった方がいいと苦しそうに述べている。この一撃が最も重要な全てであり、全ての終わりであるならと Macbeth は考えているが、これが、彼の全ての転落の始まりとなっていると言えよう。さらに、時の海に浮かぶこの狭い砂洲の現世では、やがて訪れるあの世のことはどうでもよいことにしようと、来世での尋問をリスクにかけ、将来や来世のことから逃れてしまっている。しかし、これに加えて、こうしたことは、この世で必ず裁きがあり、血なまぐさい殺人を人に教唆すれば、禍は唆した者に返ってくると逡巡している。この引用箇所では Macbeth が口にしたことは、全て Macbeth 夫妻にはね返ってくる。Macbeth は未来のことはどうでもよいと言っているように、Macbeth 夫妻は、未来も王位を継ぐ子供もなく、無間地獄のような空間に陥っていく。彼らには、Antony のように来世を Cleopatra と出会える天国として勇気を持って死後の世界に旅

立つ死生観もない。殺人を教唆すれば、禍が発案の当人を苦しめると自ら述べたように、後の Banquo 殺害の過程においても、Macbeth の心は病んでゆき、健全な眠りから見放され、それは夫人においても同様の過程を辿ることとなる。⁵ さらに Macbeth は自分が王の親族にして、臣下であり、王を迎え入れた主人として自ら短剣をふるえるはずはなく、しかも Duncan は謙虚で温厚かつその治世は公明正大なため、国王弑逆の罪は犯せないと3点から理性的に考えている。Macbeth の罪の意識に対して、Duncan は生まれたばかりの裸の赤子、駿馬に乗る智天使ケルビムたちのイメージでとらえられ、国王の美德が王弑逆の非道を訴えるだろうとみなしている。Macbeth は決心の脇腹にけりをつける拍車はなく、あるのは飛び跳ねようとする野心だけ、それも勢い余って向こう側に転げてしまうと述べており、さっさとやってしまう方がいいと言っていたが、この一撃について、逡巡し、躊躇している。

そこへ、1人宴会の座を離れた Macbeth を探しに来た Macbeth 夫人に Macbeth は次のように胸の思いを打ち明ける。

Mac. We will proceed no further in this business:
 He hath honour'd me of late; and I have bought
 Golden opinions from all sorts of people,
 Which would be worn now in their newest gloss,
 Not cast aside so soon.

Lady M. Was the hope drunk,
 Wherein you dress'd yourself? Hath it slept since?
 And wakes it now, to look so green and pale
 At what it did so freely? From this time
 Such I account thy love. Art thou afeard
 To be the same in thine own act and valour,
 As thou art in desire? Would'st thou have that
 Which thou esteem'st the ornament of life,
 And live a coward in thine own esteem,
 Letting 'I dare not' wait upon 'I would,'
 Like the poor cat i'th'adage? (I. vii. 31-44)

栄光を金ぴかの服のイメージで捉え、王から栄誉を賜ったばかりであるし、あらゆる人から黄金の評判を得たとして、もうこのことは終わりにしようとし出る Macbeth に対し、夫人は服のイメージを使って、さっきまで身に着けていた希望は酔っ払ってしまったのかと、その後眠ってしまい、今日覚めると青ざめて自分の大胆な振る舞いにおじけづくのかと聞き、Macbeth の黄

A limbeck only: when in swinish sleep
Their drenched natures lie, as in a death,
What cannot you and I perform upon
Th'unguarded Duncan? what not put upon
His spongy officers, who shall bear the guilt
Of our great quell?
(I. vii. 47-73)

Macbeth 夫人は後に “Had he [Duncan] not resembled / My father as he slept, I had done’t.”

(II. ii. 12-13) と言っているように、家父長制社会の中では、自ら剣をふるい男らしい行為をすることができないため、あらゆる手練手管を使い、夫を教唆して、己の願望を遂げようとする。こうありたい自分と勇気ある行動を一致させるのが彼女の望む「男らしさ」であり、人間に似つかわしいこと以上のことをするのが、彼女にとって男の中の男であり、それは、Macbeth がこの行為するにあたって、逡巡し、躊躇していた理性に裏打ちされた人間性を排除するものであると言えよう。⁷ 自分たちの自己実現のためには、誓ったことは何でもやるのが夫人の力説する「男らしさ」なのである。これに対して、Macbeth の劇冒頭における「男らしさ」は、“Valour’s minion”

(I. ii. 19)、“Bellona’s bridegroom” (I. ii. 55) と形容され、戦いの血しぶきの中で勇猛果敢に勝利し、回りの尊敬と名誉を得た、武勇とともに理性、秩序、忠義、人間性の上に成り立つバランスのとれた「男らしさ」であったが、Macbeth は夫人の言説によって、理性の部分を断ち切れ、秩序を外れた、自己実現の願望の上に成り立つブルジョワ個人主義的「男らしさ」を信奉するに至ってゆく。国家や社会の秩序を外れ、獣への第一歩を踏み出した Macbeth は “I am settled, and bend up / Each corporal agent to this terrible feat.” (I. vii. 80-81) と述べ、変容していく。この時点で、Duncan 殺害の決心の第一歩が、「男らしさ」の理念の変容とともになされたと考えられる。Macbeth の大きな欠陥であり、悲劇は、Duncan 殺害の理性的および倫理面での理由もなく、自らの意志ではなく、夫人に教唆されて、勇猛心が倫理秩序の枠を越え、大義を失って自己実現のみを目指し、ルネサンス的「男らしさ」から逸脱してしまうところにあると言えよう。次いで、“Away, and mock the time with fairest show: / False face must hide what the false heart doth know.” (I. vii. 82-83) と言っているように、ここでは計画実行が芝居のメタファーを使って述べられている。夫人は子供を育てたことがあり、一度誓ったからには、乳を飲む赤ん坊の脳味噌を叩き出してみせると言い放っているように、Macbeth 夫妻には子供はいないが、史実によれば、Macbeth 夫人、Gruoch は Macbeth の従兄 Gillacomgain の寡婦であり、その息子 Lulach は知能が低く、継父の死後 Malcolm のライバルとして立つことはできなかった

となっている。⁸ また、Macbeth の母は権力のある王 Malcolm II 世の姉妹であり、Macbeth はスコットランド王家の一員として、王位を継いでもおかしくはなく、史実でも、篡奪者 Macbeth と復讐者 Malcolm という Duncan の2族間の復讐と残忍の話はうろ覚えの話ほど大差ないとなっているが、この辺りの事情を Shakespeare は、国王一座の座付き作家として、省いている。⁹

夫人は王のお付きの者にお酒を飲ませ、泥酔して理性の働かない状態で豚のように眠る様子をまるで死んだように寝転がると形容している。夫人の台詞の中で眠りは死として捉えられ、このイメージはこの劇の中でもしばしば見られる。Macbeth が王殺害の決心をした直後の第2幕第1場で、インヴァネスの Macbeth 城の中庭で、Banquo は松明を持った Fleance に次のように言っている。

A heavy summons lies like lead upon me,
And yet I would not sleep: merciful Powers!
Restrain in me the cursed thoughts that nature
Gives way to in repose!—Give me my sword. (II. i. 6-9)

Banquo は睡魔が鉛のように重くのしかかってくるが、眠る気になれない、眠ると心のたがが緩んで自然とわき上がる忌わしい想念を慈悲深い天使たちよ、抑えたまえと述べると、そこに決心をした Macbeth が現れる。Macbeth が国王弑殺を考えていると、Banquo も眠りの中で忌わしい想念、悪夢を見ている。Banquo は、前日運命の3女神の夢を見たことを Macbeth に打ち明けているが、Banquo の中でも、眠りは死と結びついている。Duncan 殺害に至る場面でも、眠り及び死のイメージは、Macbeth につきまとい、Macbeth の心を病んでゆく。国王弑逆の場面へ至るまでとその後の Macbeth の変容を眠りのイメージとともに見てゆこう。

Macbeth は居城で、召使に寝酒の用意ができれば鐘をならすように、奥方に伝えるよう言いつけると、今まさに抜こうとしていたのと同じ短剣の幻影を見る。短剣は宙に舞い、彼が行こうとしていた王の部屋へと Macbeth を導く。眠りを中心に見ていくと、Macbeth は次のように言っている。

Now o'er the one half-world
Nature seems dead, and wicked dreams abuse
The curtain'd sleep: Witchcraft celebrates
Pale Hecate's off'rings; and wither'd Murther,
Alarum'd by his sentinel, the wolf,
Whose howl's his watch, thus with his stealthy pace,

With Tarquin's ravishing strides, towards his design
Moves like a ghost.—Thou sure and firm-set earth,
Hear not my steps, which way they walk, for fear
Thy very stones prate of my where-about,
And take the present horror from the time,
Which now suits with it.—Whiles I threat, he lives.
Words to the heat of deeds too cold breath gives.

[A bell rings.]

I go, and it is done: the bell invites me.
Hear it not, Duncan; for it is a knell
That summons thee to Heaven, or to Hell. (II. i. 49-64)

今、世界の半球では自然は寝静まり死んだかのように見え、邪悪な夢がたれこめた帷の中に眠りをたぶらかしていると Macbeth は言っている。憔悴した人殺しは見張り番の狼の遠吠えを合図に起こされ、抜き足差し足、Tarquin の足取りで、獲物に向かって亡霊のように忍び寄ると描写し、国王弑逆に向かう自らを憔悴した人殺しや邪悪なイメージの Tarquinius に例えている。不動の大地に、どこへ行こうと足音を聞くなと呼びかけている。言葉で語り、恐れている間は、言葉は冷たい息で行為の熱を冷ましてしまうと考えている。この時点では、Macbeth の中で、まだ言葉は、理性的な抑制力を持っているが、理性と武勇は分裂し、バランスは取れていない。ついに、夫人の決行を知らせる鐘が鳴ると、Macbeth は Duncan に向かって、この弔いの鐘を聞かないように語りかけ、その行き先は天国か、地獄かと述べている。この引用箇所でも眠りは死のイメージで捉えられ、Duncan には、Macbeth のような出口のない無間地獄に落ちていくのではなく、天国または地獄といった普通の死の旅立ちのイメージが語られている。

国王弑逆は幕外でなされ、Macbeth の夫人に対する “I have done the deed.—Didst thou not hear a noise?” (II. ii. 14) という語りの形式で、観客に知らされる。この一撃がすべてであり、すべての終わりであると思っていた Macbeth にとって、この一撃は、彼らの苦痛の始まりとなってしまう。この行為の後、Macbeth は、次のように眠りに関する叫びが聞こえたことを夫人に打ち明けている。

Macb. Methought, I head a voice cry, ‘Sleep no more!
Macbeth does murther Sleep,’—the innocent Sleep;
Sleep, that knits up the ravell'd sleeve of care,
The death of each day's life, sore labour's bath,
Balm of hurt minds, great Nature's second course,

Chief nourisher in life's feast;—

Lady M.

What do you mean?

Macb.

Still it cried, 'Sleep no more!' to all the house;
'Glamis hath murther'd Sleep, and therefore Cawdor
Shall sleep no more, Macbeth shall sleep no more!' (II. ii. 34-42)

Duncan 王を殺害したことにより、Macbeth には変容が見られる。事の決行前から幻影を見ていたが、弑逆後は、Macbeth だけに聞こえる声があり、心が病んでゆく。事に及んでから、夫妻には罪なき眠りは失われてゆく。眠りは日々の生活の死として捉えられているが、心労というもつれた糸をほぐす眠り、つらい労働のあとの湯浴みはなくなり、Macbeth にはもう眠りはないという声が館中に響いたと気に病んでいる。これに対して、夫人は Macbeth が王殺害に使った短剣を持ち返ったことをなじり、殺害現場へおいてくるよう指示する。これに対して、Macbeth と夫人は次のようにやりとりしている。

Macb.

I'll go no more:

I am afraid to think what I have done;
Look on't again I dare not.

Lady M.

Infirm of purpose!

Give me the daggers. The sleeping, and the dead,
Are but as pictures; 'tis the eye of childhood
That fears a painted devil. If he do bleed,
I'll gild the faces of the grooms withal,
For it must seem their guilt. [Exit.—Knocking within.

Macb.

Whence is that knocking?—

How is't with me, when every noise appals me?
What hands are here? Ha! they pluck out mine eyes.
Will all great Neptune's ocean wash this blood
Clean from my hand? No, this my hand will rather
The multitudinous seas incarnadine,
Making the green one red. (II. ii. 49-61)

王弑逆の罪を犯した Macbeth には、王権を手に入れる計画を成就した達成感はなく、自分のした行為を思っただけでぞっとし、もう一度見ることはできない。意気地なしになってしまった夫に代わり、短剣を部屋へ返しに行く Macbeth 夫人にとっては、眠っている人も死んでいる人も絵姿のようなものとして、眠りと死が同一視されている。夫人が短剣をもって退場し、1人になった Macbeth は舞台裏で扉を叩くちょっとした音にもびくついて、大海原の水を使いければ、

この手から罪を洗い落とせるどころか、罪を犯したこの手が大海原を朱に染め、広大な青海を真紅にしてしまうだろうと五感を使った表現で自らの心情を描写している。夫人が戻ってくると、Macbeth は、“To know my deed, ’twere best not know myself.” (II. ii. 72) と言い、この個所で既に、しでかした行為を引きずって生きるのなら、自分を知らぬほうがよいと今までの Macbeth のアイデンティティーが崩壊し、自己分裂し始めている。さらに門を叩く音に、“Wake Duncan with thy knocking: I would thou / couldst!” (II. ii. 73-74) と悔恨の念を述べている。

第2幕第3場では、門を叩く音に応じて城門を開くと、早く起こすように王から言いつかった Macduff と Lenox によって、王が惨殺されているのが告げられ、警鐘が鳴らされる中で、Macbeth は次のように述べている。

Macb. Had I but died an hour before this chance,
I had liv'd a blessed time; for, from this instant,
There's nothing serious in mortality;
All is but toys: renown, and grace, is dead;
The wine of life is drawn, and the mere lees
Is left this vault to brag of. (II. iii. 89-94)

王惨殺の悔恨の念はさらに続いている。「こんなことの起こる1時間前に死んでいたら、恵まれた人生だったと言えただろうに」と言っているように、これはある意味で、回りの者を欺く言葉ではあるが、**Macbeth** の真実が吐露された台詞であるとも言えよう。実際に、**Duncan** 殺害の前後から、**Macbeth** の心は闇で閉ざされ、今までの武勇に輝いた業績から、誉れも徳もない、取るに足らぬ滓ばかりのまやかしの時間を **Macbeth** は生きることになる。

王殺害は王の部屋付きの者たちの仕業と考えられ、その顔も手も血に染まり、短剣も血がついたまま枕の上にあったことが **Lenox** より報告されると、**Macbeth** は早まり、ついかつてなって2人を殺してしまったことを告げる。これに対して、その理由を **Macduff** に聞かれて、**Macbeth** は次のように答えている。

Macb. Who can be wise, amaz'd, temperate and furious,
Loyal and neutral, in a moment? No man:
Th'expedition of my violent love
Outrun the pauser, reason.—Here lay Duncan,
His silver skin lac'd with his golden blood;
And his gash'd stabs look'd like a breach in nature
For ruin's wasteful entrance: there, the murderers.

Steep'd in the colours of their trade, their daggers
Unmannerly breech'd with gore. Who could refrain,
That had a heart to love, and in that heart
Courage, to make's love known? (II. iii. 106-16)

こうした台詞は周囲の者に自分たちの罪を隠す演技の部分でもあるが、その中に **Macbeth** 内面の思いも現れている。賢明と同時に動転し、沈着と同時に激怒し、忠誠と同時に冷静でいられる者がいるのかと問いかけ、いはしないと言っているが、このバランスが取れていれば、劇当初の理性に裏付けされた武勇に輝く **Macbeth** でいられたはずだ。激しい愛の心がひきとめようとする理性を振り切って暴走してしまったと述べている。目前の **Duncan** 王の死の様子は、王の銀の肌には黄金の血が縦横に走り、大きく開いた傷口には、生命という城壁の裂け目さながらに破壊の入り口になっていると尊敬を含めた表現で描写されている。そこに人殺しが果たした仕事の色に染まり、いぎたなく短剣に血のりをつけたままいたため、我慢できなかったと理由が述べられる。愛する心があり、その心に愛を示す勇気があるなら、誰に抑えられようと言われると、そこで、**Macbeth** 夫人は “Help me hence, ho!” (II. iii. 116) と言い、気絶する。夫人の気絶は、女性らしい正真正銘の失神と取る説と、夫から注意をそらすためのたくらみであり演技と取る説と批評の分かれるところではある。¹⁰ **Nicholas Brooke** は曖昧ではあるが、おそらく演技であろうと見ている。¹¹ 夫人は初めから **Macbeth** に周囲を欺く演技を強要しており、人々の注意をそらすための演技の部分もあると考えられ、**Macbeth** の台詞は **Duncan** に向けられた言葉とはなっているが、愛する心があり、愛を示す勇気が心にあるなら、理性の手綱を振り切って激しい愛が暴走する勇気ある行動は、彼女の求める「男らしさ」であり、この台詞に共鳴し、感動したのではないかと考えられる。

III

次に、**Banquo** と **Fleance** 殺害の計画はどのような経緯で進められ、それによって **Macbeth** はどのように変化していくのか、その過程と男らしさの概念である勇気と理性との関係がどのようになっていくのかも、見ていこう。第3幕第1場で **Macbeth** は居城で公の祝宴を開くことになり、**Banquo** は昼間外出し、晚餐に戻る許可を得ている。**Banquo** が外出すると、**Macbeth** は **Banquo** を怖れる理由を次のように考え、刺客を呼んでいる。

To be thus is nothing, but to be safely thus:
Our fears in Banquo
Stick deep, and in his royalty of nature
Reigns that which would be fear'd: 'tis much he dares;
And, to that dauntless temper of his mind,
He hath a wisdom that doth guide his valour
To act in safety. There is none but he
Whose being I do fear: and under him
My Genius is rebuk'd; as, it is said,
Mark Antony's was by Caesar. He chid the Sisters,
When first they put the name of King upon me,
And bade them speak to him; then, prophet-like,
They hail'd him father to a line of kings:
Upon my head they plac'd a fruitless crown,
And put a barren sceptre in my gripe,
Thence to be wrench'd with an unlineal hand,
No son of mine succeeding. If't be so,
For Banquo's issue have I fil'd my mind;
For them the gracious Duncan have I murder'd;
Put rancours in the vessel of my peace,
Only for them; and mine eternal jewel
Given to the common Enemy of man,
To make them kings, the seed of Banquo kings!
Rather than so, come, fate, into the list,
And champion me to th'utterance!—Who's there?—

(III. i. 47-71)

Macbeth は王になっても、心安らかではなく、Banquo への怖れが胸深くに突き刺さっている。Banquo の高貴な気性と勇気を導き、安全に行動する英知に Macbeth は怖れを抱き、怖れる存在はあの男をおいて他にいないとしている。こうした英知と勇気のバランスの取れた関係の中にある大義の上に成り立つ勇猛心は Macbeth が以前誇っていたが、夫人による教示を受け切り捨ててきたものであるからだ。魔女たちが Banquo を代々の王の父と呼んだことにも、Macbeth は怖れを抱いている。自分の子供が王位を継ぐのではなくて、王位が自分の直系でない者の手によってもぎとられる運命にあることによりやく気付き、驚愕している。Banquo の子孫のために心を汚し、慈悲深い Duncan を殺害し、平和な心の盃に憎悪の毒を盛ったのも、己の永遠の宝石、魂を悪魔に売り渡したのも、すべては Banquo の種を王にするためだったのかと不安にから

れている。この台詞から分かるように、Macbeth には Duncan への敵意があったわけではなく、ただ野心のため、心を汚す行為に及んだ経緯が表れている。そして、運命に対して、そうはさせないと、とことんまで闘うと豪語している。この後、Macbeth は、運命に見放され出直したいと思っている刺客を呼び出し、彼らをひどい目に遭わせてきたのは Banquo だと吹聴し、Banquo と Fleance の殺害を命ずる。そして、Banquo に対して、“It is concluded: Banquo, thy soul’s flight, / If it find Heaven, must find it out to-night.” (III. i. 140-41) と独白し、Macbeth は自分自身の運命に関しては、罪の報いを受けると考えているが、手に掛けた相手、Banquo の魂は天国へ飛んでいくものとみなしている。

第3幕第2場、フォレス城の1室で Macbeth 夫人は国王殺害を遂げ、王妃になれたのに、満足感はなく、不安が増す状況であり、それは Macbeth と似通った心理状況であると言えよう。夫人は王を呼んで次のように話をする。

Lady M.

Nought’s had, all’s spent,

Where our desire is got without content:

’Tis safer to be that which we destroy,

Than by destruction dwell in doubtful joy.

Enter Macbeth.

How now, my Lord? why do you keep alone,

Of sorriest fancies your companions making,

Using those thoughts, which should indeed have died

With them they think on? Things without all remedy

Should be without regard: what’s done is done.

Macb.

We have scorch’d the snake, not kill’d it:

She’ll close, and be herself; whilst our poor malice

Remains in danger of her former tooth.

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,

Ere we will eat our meal in fear, and sleep

In the affliction of those terrible dreams,

That shake us nightly. Better be with the dead,

Whom we, to gain our peace, have sent to peace,

Than on the torture of the mind to lie

In restless ecstasy. Duncan is in his grave;

After life’s fitful fever he sleeps well;

Treason has done his worst: nor steel, nor poison,

Malice domestic, foreign levy, nothing

Can touch him further!

(III. ii. 4-26)

は物が増殖するイメージがところどころ使われているが、この引用箇所では **Macbeth** の悪事が増殖し強化されるイメージが使用されている。また、上の引用箇所の直前で **Macbeth** は夫人に **Banquo** と **Fleance** が生きていると思うと心の中は蠍でいっぱいだと述べ、疑心暗鬼の様子をたくさん人の蠍のイメージで表現しているが、これに対して **Macbeth** 夫人の “*But in them Nature’s copy’s not eterne.*” (III. ii. 38) の一言が、**Macbeth** の行動を後押ししている。¹² 第2幕第4場で、**Rosse** と老人が **Duncan** 殺害の夜の天候の凄まじい様子を語る中で **Duncan** の名馬中の名馬が厩を飛び出して暴走し、共食いした話が強烈ないイメージとして語られている。**Macbeth** の増殖する悪はいったん始めたら、自らを食らい尽くすまで、とどまるところなく増強してしまう。そのような意味でも、この作品は現代的であると言えよう。

第3幕第4場のフォレス城での祝宴の場で、Macbeth は刺客から Fleance の逃亡と Banquo 暗殺の次第を聞く。この宴会の場に出席すると約束した通りに、Banquo が亡霊となって現れ、Macbeth の席を占めてしまう。Macbeth は亡霊に向かって、自分の仕業ではなく、血まみれの髪を彼に向かって振り回すなど言い、気にするものかと語りかけることで勇気のあるところを見せようとするが、諸侯には君主が取り乱して失態を演じているように見えてしまう。Macbeth が “If charnel-houses and our graves must send / Those that we bury, back, our monuments / Shall be the maws of kites.” (III. iv.70-72) と言っているように、手がけた罪なき者に関しては、死者が復活するイメージの死生観を Macbeth は持っている。¹³ この考えは、死は永遠の名声であり、この世で負けても、それを超越し、永遠の名声、永久の生命を得るという Cleopatra の死生観とは異なっている。Macbeth は次のように彼の死生学について述べている。

Macb. Blood hath been shed ere now, i'th'olden time,
Ere humane statute purg'd the gentle weal;
Ay, and since too, murthers have been perform'd
Too terrible for the ear: the time has been,
That, when the brains were out, the man would die,
And there an end; but now, they rise again,
With twenty mortal murthers on their crowns,
And push us from our stools. This is more strange
Than such a murther is. (III. iv. 74-82)

人が法を定め、世の中が浄化されて穏やかになるずっと前の大昔から、これまでだって血は流れてきたと言い、かつては脳味噌が叩きだされると、人は死んでそれきりだったのが、今では、昔

と違い、頭に無数の致命傷を受けても死者が蘇り、椅子から人を押しのける様を殺人そのものより、奇妙ととらえている。Banquo の亡霊は一度消えるが Macbeth が Banquo 不在を口にする、再び姿を現す。Macbeth はこれに対して “or, be alive again, / And dare me to the desert with thy sword;” (III. iv. 102-103) と述べ、目の前にいる Banquo を生き返り、魂の再生とみなしている。さらに、“Hence, horrible shadow! / Unreal mock’ry, hence!” (III. iv. 105-106) と言い、亡霊が姿を消すと、これで男になれる、大丈夫であると言い放つが、諸侯の新王権に対する信頼は揺らぎ始めている。Macbeth が Banquo の亡霊のことを口走りそうになったため、夫人は急いで順番などおかまいなく諸侯に退出を求めている。初めての新王権の威厳を示す行事が Banquo の亡霊と Macbeth の狂態のため台無しになり、プロットは Macbeth 政権の転落を印象づける先触れとなっている。今までありはしないものしかないと言っていた Macbeth であるが、目前の亡霊の Banquo の亡霊に存在しないまよわしの姿と呼びかけ、亡霊が消えると何とか男らしさを取り戻し、平静を保ったが、彼の抱える罪悪感と恐怖のイメージを隠そうとして演技したのに、むしろそれをさらけ出してしまっている。

Macbeth は宴席に欠席した Macduff にその理由と反逆の意図を確かめるべく使いを出すことにし、さらに、魔女のところへ行き、今後のことを聞き出す覚悟をしている。そして、次のように覚悟を述べている。

I am in blood
Stepp’d in so far, that, should I wade no more,
Returning were as tedious as go o’er.
Strange things I have in head, that will to hand,
Which must be acted, ere they may be scann’d. (III. iv. 135-39)

Macbeth はここで、自分のためなら、大義も知ったことかと述べ、以前のような忠義や秩序に基づいた武勇ではなく、ブルジョワ個人主義的な利己目的の殺戮者となってしまう。ここまで血の川に踏み込んだからには、いまさら渡りたくないと言っても、引き返すも、渡り切るも苦労は同じ、渡るのみと考えている。罪の意識もあり、それがあゆむゆえに、引き戻せず、人間以下の者になり下がってしまっている。思いもよらぬ企てが頭にあふれ、手に乗り移る、じっくり考える前にやるしかないと言いつつ放っている。今までの Macbeth の思慮の上に成り立っていたルネサンス的武勇、「男らしさ」はここで完全に崩れてしまっている。夫人は Macbeth に自然の妙薬、眠りが必要と指摘するが、それは、夫人においても同じことであり、彼らはお互いをいたわり、眠

ろうとするが、罪を犯してから眠ることもできず、未来につながる後継者に恵まれることもない。その上 Macbeth は、これほどの罪を犯していても、悪事の実行において彼らはまだ、未熟であるとなしている。

Macbeth が考える前に行動すると覚悟を決めたと同時に、第3幕第6場で、Northumberland 公 Siward とその息子の Siward も加わり、イングランド王の宮廷で王の支持も得て、Malcolm を中心とし、Macbeth 打倒の決起が着々となされていく。魔女たちに会い、魔女たちの作り出す幻影を見せてもらい、その二枚舌によって、自分の未来が安泰のように思っていた Macbeth は、8人の王の行列と Banquo の亡霊を見て、彼が Banquo の子孫を王とするための一手段にすぎないことにうすうす気づき、これからは心に浮かんだ瞬間に手を動かし、もくろみを行為の王冠で飾るため、思いついたらすぐやると決意し、Macbeth はファイフの領主 Macduff の城に奇襲をかけ、妻子ともども一族郎党刃にけることにする。ここで、Macbeth の「男らしさ」から熟慮は消え、彼は考えることをしない感覚の麻痺した殺戮の鬼になり下がってしまう。「男らしさ」の変容とともに、劇のプロットの転換点は、この時点にあると言えよう。¹⁴

第4幕第3場では、Rosse が Macduff に祖国スコットランドの様子を、善男善女の命が帽子の花よりも早く事切れ、病でしばむひまもないと Macbeth の暴政による死のイメージを植え付けている。第5幕第3場で、Macbeth の城内では、多くの諸侯が脱走し、敵に寝返っている。Macbeth はこうした自身の状態を次のように認識している。

I have liv'd long enough: my way of life
Is fall'n into the sere, the yellow leaf;
And that which should accompany old age,
As honour, love, obedience, troops of friends,
I must not look to have; but in their stead,
Curses, not loud, but deep, mouth-honour, breath,
Which the poor heart would fain deny, and dare not.
Seyton!— (V. iii. 22-29)

Macbeth は自分の人生が干からびてしぼんだ状態であり、黄ばんだ枯葉の黄落の時であると自覚し、この年なら当然持つべき榮譽、愛、従順、大勢の友人を持つことがかなわぬことを認識し、外的にも内的にも疎外感を味わっている。さらに第5幕第5場で、Macbeth は、城壁に旗を掲げ、この城は難攻不落と周囲をせせら笑っているが、女たちの泣き声を耳にして、“I have supp'd full with horrors: / Direness, familiar to my slaughterous thoughts, / Cannot once

start me.” (V. v. 13-15) と言って恐怖の味をなめつくし、殺戮の思いに慣れてしまうと、もはやびくつくこともできないと、感覚の麻痺した殺戮の自動人形と化したデカダンスに満ちた台詞を述べている。そこへ、悪魔との説もある *Macbeth* の部下、*Seyton* が王妃の死を告げる。¹⁵ これを受けて、*Macbeth* は次のように彼の死生観を含んだ台詞を述べている。

Macb. She should have died hereafter:
 There would have been a time for such a word.—
 To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
 Creeps in this petty pace from day to day,
 To the last syllable of recorded time;
 And all our yesterdays have lighted fools
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!
 Life's but a walking shadow; a poor player,
 That struts and frets his hour upon the stage,
 And then is heard no more: it is a tale
 Told by an idiot, full of sound and fury,
 Signifying nothing. (V. v. 17-28)

恐怖をしたたか舐めた今、どんな恐ろしいことにもぎくりともしないと述べた直後に、皮肉にも最愛の妻の訃報を聞いた *Macbeth* は冷静に、何も今死ななくてもいいものを、そんな知らせには、このような切迫した時でなくもっとふさわしい時があったろうにと寂寥感を込めつつ、淡々と内面の思いを吐露する。この夫婦は双子のように対になって、劇のプロットの中で転換点が来るまで機能しており、今までの *Macbeth* 夫人の言説や言い回しは *Macbeth* の先行体系になっている。たとえば *Macbeth* が刺客に *Banquo* 暗殺を命じる時に繰り返す「男なら」という台詞や、*Banquo* 殺害前に夜を呼び込む場面など、その例として挙げられる。そのため、夫人の時ならぬ死の報告は *Macbeth* の転落と死が迫りつつあることを *Macbeth* に予示するものと言えよう。今まで、愛する妻のために、慈悲深い *Duncan* 王を手にかけて、悪魔に魂を売り渡し、悪事に手を染めてきた *Macbeth* であったが、その妃が先に逝ってしまったのである。*Macbeth* にとって、栄光をつかむまでは、時は比較的早く過ぎてきたが、最後に彼の周りには、虚無感とニヒリズムであり、その意味でもこの作品は現代的であると言えよう。*Macbeth* にとって、あまり気の乗らない国王弑逆に手を染めてから、時間は無意味な空転の時間の経過にすぎず、明日も、そのまた明日も、時は、1日1日がゆっくりとした足取りで這うように、時の記録の終の一語、最後の審判の瞬間にたどり着くためのものだ。昨日という今までの時間の経過は愚かな人間のた

めに塵に帰る死の道を照らしてきたにすぎない。Macbeth は栄光に取り憑かれた己の人生を、芝居のメタファーで語っている。Macbeth は自らの悪事について、キリスト教的な見地からも、悪人の人生は歩き回る影法師、下手で哀れな役者にすぎないとアイロニカルに述べている。舞台のあいだは大威張りでわめき散らしても、幕が下りればそれきりであり、弑逆の罪を犯しても、王位を Banquo の子孫に受け渡す役にすぎない。人生は愚かな者の語る1場の物語であり、怒号と狂乱にあふれていても何の意味もありはしないと自らの死生観を芝居の比喻で語っている。ここで示されているのは、主人公の規模の矮小化と、ジェイムズ朝演劇における栄光に取り憑かれた英雄の虚無感に満ちた転落の人生であると言える。

IV

次に Macbeth と他の悲劇の主人公 Antony や Hamlet の死生観、及び Macbeth 夫人や Cleopatra の死生観の違いについて比較検討していこう。魔女に関しては、流動的な存在であり、Macbeth や夫人の心象ともとらえられるため、Macbeth や Macbeth 夫人に関するところでまとめて考察する。Macbeth の創作年代について、Arden 版の Kenneth Muir は、1603年から1606年頃、E. K. Chambers は1606年前半とみなしており、この作品は夏の御前興業前の1606年春から夏とみるのが一般的である。¹⁶ Antony and Cleopatra の創作年代については Chambers や Frank Kermode、John Wilders に従い、1606年終わりから1607年始めとみている。¹⁷ また、Hamlet の執筆年代については、Chambers や E. A. J. Honigmann に従い、1599年後半から1600年始めと見ている。¹⁸ 其々の作品は執筆年代も近く、ジェイムズ朝始めに作られており、比較検討することに意義があると考えられる。まず、Macbeth にとって、身近な Macbeth 夫人の生き方、あるいは死生学はどのようなものかまとめていこう。夫人にとって、死は眠り、絵空事と同じようなものであり、自然の範疇の中に、人の期限は無限ではないものとして捉えられていた。Macbeth 夫人にはブルジョワ個人主義的な見解が見られ、条件が整えば自分たちのためなら、何でもやってのけ、一度計画したら、逡巡したり、躊躇することない強い気概の持ち主である。しかし、男性中心の家父長制度社会の中では、自ら剣をふるうことはできないため、彼女の憧憬する「男らしさ」を夫に求め、あらゆる手練手管を使って自らの望む権力を手に入れるために夫を扇動し、Macbeth の人格や自身のセルフコントロールも失わせてしまう。一度行動を起こしてからは、満足感はなく、さらなる不安に苛まれ、抹殺してきた女らしさ、無意識の中の罪の意識の中に夢遊病として埋没してしまう。彼女は家父長制度の中では、夫を唆し、破滅させる魔女的

な役割であり、忌避され、排除される存在になっている。**Macbeth** 夫人はそのような意味でも、言説も魔女と繋がって描かれていると考えられる。同様に、男性中心の社会から忌避される存在として、魔女たちがいる。魔女たちは二律背反のことを同時に述べる二枚舌でもって、**Macbeth** を唆し、破滅させていく。魔女たちはその親分格である **Hecate** が第3幕第5場で死生に関して述べているように、人の生死の予言や謎かけは **Hecate** に相談なしに勝手にしてはいけないことであり、こうした接触が異端行為と当時みなされていた背景を物語っている。¹⁹ **Hecate** がこの場で述べているように、地獄の入口、冥界の川アケロンの洞窟に、自分の運命を知りたくてやって来る **Macbeth** の不吉な破滅に努めるとというのが、魔女たちの言説の趣旨である。三日月の端から垂れる不思議な蒸気の雫をひとつつまえて蒸留した幻影を見て、悪の主人公は運命と死を蔑み、地獄に落ちていく。知恵と恵と恐怖があれば持たないはずの野望を持ち、安心と思う心が人の敵というのが、魔女たちの **Macbeth** の死生に関する見解となっている。

では、魔女の系譜に入る **Cleopatra** の死生観はどのようなものであろうか。**Cleopatra** はアクティウムの海戦で、**Antony** を敗北に導き、部下を見捨て、彼女の後を追って **Antony** に敗走させ、武将として恥辱に満ちた行為を取らせた点でも、**Macbeth** 夫人同様、男性を牛耳り、破滅させる運命の女として、魔女の系譜に充分属すると言えるであろう。**Cleopatra** は **Antony** に実際の **Antony** 以上の者、男の中の男であり、誰よりも気高く、この世の王冠たる理想を追求し、愛する女性を大切にし、英雄であることを固執するあまり、二重の足かせから指揮官としての **Antony** を破滅に導いた意味において、**Macbeth** 夫人と共通するものを持っている。**Cleopatra** は死に際して、ローマ風の自決の道を考えているが、蛇というエジプトらしい手法を使い、エジプトの女神 **Isis** の衣装をまとして、**Caesar** を出し抜くために、毅然とした態度で死に臨んでいる。彼女にとって大切なのは、すべての行為に終止符を打ち、偶然を退け、有為転変を食い止めることであり、彼女は死を、自然を越えて変化を食い止められる永遠なるもの、眠りと捉えている。**Cleopatra** は来世へ旅立つ時、永遠不滅へのあこがれがあるとして、ローマ人の流儀に従いつつも、すべてを相殺する永遠の世界へ旅立つ。**Cleopatra** は、死は永遠の名声であり、この世で負けても、それを超越し、永遠の名声、永久の生命を得るという彼女独特の死生観を展開する。ここには、**Isis** の夫である **Osiris** 神の、「人は死ぬと誰でもオシリス神となって、再生、復活し、永遠の生命を得る」というオシリス信仰の影響が見られると考えられる。²⁰ **Cleopatra** は死に臨んで、シナドス川のほとりで **Antony** を出迎える夢を語り、私の勇気があなたを夫と呼ぶ資格の証となりますようにと言い、彼女の言説と王者としての死によって、惨めな **Antony** の最期も異化され、高められる。**Cleopatra** は死を、自然を越えて、変化を食い止める永遠の眠り、夢とし

て提示しながら、Antony の理想化された世界の覇者としての雄大さや破格の規模の大きさ、寛容を、自然を越えて歴史に名を残すヴィジョンもまた自然界の一部であることを示している。Cleopatra は Isis 神の装束で女王としての立派な最期を示すことにより、来世で Antony と出会える至福、永遠の名誉と生命、中世的世界観を提示する。こうした幸福な世界観は、Macbeth 夫妻にはない。彼らにあるのは、未来のことなど、どうでもよいと言っているように、来世もなく後継者もない、何もない無間地獄のような虚無感であり、出口のない空間、世界観であると言える。

Antony の死生観としては、1 つはローマ人として、“a Roman by a Roman / Valiantly vanquished.” (*Antony and Cleopatra*, 4. 15. 59-60) と自ら述べて自決するように、最期の時が来たら、偉大なローマの武人として、世界の覇者として、歴史に名を刻むことを祈り、勇気を持って花嫁のベッドに向かうように死の手に飛び込む死の花婿のイメージで捉えている。²¹ Antony は次のように自らの思い浮かべる死後世界を語っている。

Eros! — I come, my queen. — Eros! — Stay for me.
Where souls do couch on flowers we'll hand in hand
And with our sprightly port make the ghosts gaze.
Dido and her Aeneas shall want troops,
And all the haunt be ours. Come Eros! Eros!
(*Antony and Cleopatra*, 4. 14. 51-55)

部下の Eros に声掛けしながら、Antony が思い浮かべる死後世界は、魂が花々に囲まれて憩うエリシオンであり、そこで Antony と Cleopatra は手に手を取って陽気にふるまい、亡霊たちに目を瞞らせ、Dido と Aeneas の周りのお供の霊も Antony と Cleopatra についてくるという祝福された極楽のイメージである。この個所はアクティウムの海戦で敗戦し、武将としてのアイデンティティーを失い、Cleopatra に対しても、裏切り行為があったと疑っているところへ、女王の偽の死の知らせを受けて、Cleopatra が死んでなお生き延びるのは拷問であり、恥さらしと Antony は考え、自害を決意した時の台詞である。Antony の死生観としては、現世では、恥さらしでつらくとも、死後は祝福され、救われるといった中世的死生観であると言える。瀕死の Antony は Cleopatra の胸に抱かれて、末路の無残な変わりようを嘆くことなく、彼の偉大な世界の王者としての昔の数々の栄光を思い出すよう言い残し、ローマの武人として亡くなっていく。Antony の破格の大きさとしては、Cleopatra の偽りの死の報告にも気付かず、とらわれず、政治においても戦争においても、Octavius Caesar の能力に出し抜かれ、自堕落な醜態をさらして

きた一面もあったが、最期にあたり、来世で Cleopatra と一緒になり、偉大な世界の覇者としての名声を歴史に刻むことを願って旅立ってゆくところにあると言えよう。Macbeth の世界観はさらに病んでいて、このような破格の大きさや、樂觀主義は見られない。

Hamlet と Macbeth の共通点としては、課題の行動を起こす前に逡巡する点であるが、Macbeth は、次第に、熟慮することをやめ、考える前に行動を起こすよう決心するのに対し、Hamlet は死を眠りと捉えているが、死という眠りの中でどんな夢を見るのか分からず、死後にくるものが怖い、この世の重みに耐えると認識している。Hamlet においては、熟慮が飽和状態に達すると、雀一羽落ちるのも神の摂理であり、この世の物事には神が直接介入するというカルバン派の信条を提示する。それ以前は、Claudius が1人で懺悔する復讐できる機会に臨んで、先王 Hamlet が罪業の残る中惨殺され、あの世でどのような勘定書を書きつけられるか分からないのに、罪深き Claudius が改悛したところで復讐を遂げれば、魂を清めて死出の旅に送り出してしまうとカトリック的な見解を示して、死について思いを馳せ、潔く覚悟ができると、Claudius の悪業が飽和状態に達するまで待ち、復讐の課題を果たして、間接のはずれたこの世を正すという使命を全うする。Hamlet はこの世を過酷な現世とみなし、死出の旅を昇天する至福、静寂に満ちた安らぎと見ている。Hamlet は最期にあたり、回りの者を見まわして、友人 Horatio に次のように頼んでいる。

You that look pale and tremble at this chance,
That are but mutes or audience to this act,
Had I but time (as this fell sergeant Death
Is strict in his arrest) — O, I could tell you —
But let it be. Horatio, I am dead.
Thou livest: report me and my cause aright
To the unsatisfied. (Hamlet, 5. 2. 318-24)²²

Hamlet は Horatio に生きて、Hamlet に課せられた大義のことを、これまでのいきさつを正しく伝え、Hamlet に汚名が残らないよう頼み、Horatio も彼の最期に、舞いのぼる天使の群れの歌声に乗って永久の安らぎに赴かれますようにと声をかけている。Macbeth の最期にあたっては、王位篡奪者としての認識がなされるだけで、それ以上の称賛の言葉を投げかける者は誰もいない。

V

最後に、Macbeth の死への大詰めの過程をたどりながら、自然との関わりも含めて、考察をまとめていこう。第5幕第2場で、ダンシネン近くで、Malcolm、老 Siward と Macduff 率いるイギリス軍が近づきつつあるのが諸侯により告げられ、Macbeth はダンシネンの守りを厳重に固め、精神が病んでむくみ、自制心のたががはずれてしまったことが語られている。そのようすを Angus が “Now does he feel / His secret murders sticking on his hands;” (V. ii. 16-17) と述べ、さらに “now does he feel his title / Hang loose about him, like a giant’s robe / Upon a dwarfish thief.” (V. ii. 20-22) と、衣装の比喻を使って言及している。密かに行った殺戮の血が両手にこびりついて離れない病的なイメージは Macbeth 夫人の前場での夢遊病の中での罪の意識を観客に想起させ、Macbeth が夫人と一心同体の夫婦であることを印象づける。さらに国王弑逆の罪が彼らの病理の原因であることを示唆する。国王の称号も小人のこそ泥が着る巨人の衣装の比喻で語られ、Macbeth の人格の矮小化が印象づけられている。第5幕第4場では、Macbeth が自信満々の暴君として語られ、ダンシネンに立てこもり、敵対するイギリス軍の包囲に持久戦で当たる構えが報告されている。第5幕第5場で、バーナムの森が動き出したのを部下から動き出したのを聞き、それを確かめた Macbeth は次のように述べている。

If this which he avouches does appear,
 There is nor flying hence, nor tarrying here.
 I ’gin to be aweary of the sun,
 And wish th’estate o’th’world were now undone.—
 Ring the alarum bell!—Blow, wind! come, wrack!
 At least we’ll die with harness on our back. [*Exeunt.*
 (V. v. 47-52)

Macbeth は、まことしやかな嘘をつく悪魔の二枚舌が怪しくなり、ここから逃げても、踏みとどまっても、無駄であり、破滅を呼び込み、せめて甲冑一式身に着けて、討ち死にする覚悟を固めている。Macbeth の死に臨んでの態度には、前コーダーの領主の散り際のみごとな武人たる様子が先行体系となつていてと考えられる。Macbeth は “Why should I play the Roman fool, and die / On mine own sword? whiles I see lives, the gashes / Do better upon them.” (V. viii. 1-3) と言い、Antony とは異なり、死に際して、ローマ人の流儀には従わず、最期まで闘う覚悟

を決めている。そこへ、避けていた Macduff と出会った Macbeth は、Macduff こそ月足らずのまま帝王切開で母の腹から引きずり出されたことを告げられると、Macbeth の気力は一気に萎えてしまい、当初 Macduff と戦うのを拒む。そうであれば降参して、さらし者として見世物になるように Macduff から告げられると、Macbeth は、断固として次のように言い放っている。

Macb. I will not yield,
To kiss the ground before young Malcolm's feet,
And to be baited with the rabble's curse.
Though Birnam wood be come to Dunsinane,
And thou oppos'd, being of no woman born,
Yet I will try the last: before my body
I throw my warlike shield: lay on, Macduff;
And damn'd be him that first cries, 'Hold, enough!'
[Exeunt, fighting. Alarums. Re-enter fighting, and Macbeth slain.
(V. viii. 27-34)

Macbeth は甲冑一式で身を固め、百戦錬磨の盾を掲げ、体を守り、最後まで闘うと述べている。両人は戦いながら退場し、そして再び戦いながら入場し、Macbeth は戦って果てる。Macbeth の死と対照的に、若き Siward の大義に基づいた武人としてのりっぱな武勇の力と男らしい討ち死の様子が Rosse によって称賛され、語られる。最終場で、Macduff が Macbeth の首を持って登場し、“Hail, King! for so thou art. Behold, where stands / Th'usurper's cursed head: the time is free.” (V. ix. 20-21) と述べているが、病巣の根たる Macbeth の死に関するあっさりした言及はこの個所と、Malcolm 新王の新たな時代の幕開けとともに着手しなければならない所信表明演説の中で“this dead butcher, and his fiend-like Queen” (V. ix. 35) として言及されるにすぎない。妃については、その悲惨な死の在りようが述べられているが、Macbeth については上記に引用した呼称以外に何も語られず、周囲からの冷遇と疎外感が印象づけられる。新王 Malcolm の諸侯に対する新たな時代の幕開けの挨拶は簡潔明瞭で若々しくすっきりとしており、希望が感じられよう。

Hamlet は神の摂理への認識を死生観として展開し、英雄の死として提示した。Antony は現世ではみじめでも来世では、Cleopatra と出会い、過去の偉大な栄光を示すことができるという死生観を示し、Cleopatra は死後、再生、復活、永遠の生命を得るというオシリス信仰に基づいた死生観に加えて、Cleopatra のイリュージョンを、実は自然界に存在する、自然を越えて永遠の名を残すアートとして提示した。Macbeth は自らの考えが、魔女や恐妻により、攪乱され、

バランスを失い、武将としての大望が歪められた形となり、栄光に取り憑かれた個人主義者として、矮小化された悲劇の主人公として散っていく。熟慮も内省もやめ、武に基づく、公的尊厳や社会規範からはずれ、自己実現の野望にのみ燃え、殺戮の鬼と化し、破滅していく。Macbeth は社会的閉塞感と、恐怖の中で証を残すことに終始し、罪を繰り返す、自らの野望に食い尽くされてしまう。そのような意味において、Macbeth は近代的演劇であり、栄光に取り憑かれた悪漢たちは、個人主義の無間地獄の中で耐えきれず、出口もなく、埋没していく。そこにあるのは、虚無感だけであり、Antony や Cleopatra のように、自然を越えて名を残すアートもイリュージョンもない。そのため、劇の終りにおいて、Hamlet のような自己礼賛も他者による称賛の言葉もなく、哀れな役者として与えられた1場を演じるのみの、1個の人間としての、自己消滅願望が見られるだけである。Macbeth の死生観としては、Antony and Cleopatra の中の Enobarbus の “I will go seek / Some ditch wherein to die; the foul'st best fits / My latter part of life.” (Antony and Cleopatra, 4. 6. 38-40) という自己消滅型願望に近いと言えよう。Macbeth の死に際しての世界観は、自然を越えることができず、自然の中に含有される閉じ込められた何も無い空間であると言えるであろう。そのような閉塞感や矮小化といった意味においても、Macbeth は近代的作品であり、主人公 Macbeth はジェイムズ朝演劇の栄光に取り憑かれたヒーローたちの先駆け的な存在なのではないかと考えられる。

N O T E S

- 1 Terry Eagleton, “The Witches Are the Heroines of the Piece...,” in *New Casebooks: Macbeth*, ed. Alan Sinfield (London: Macmillan, 1992), pp. 46-47.
- 2 G. K. Hunter (ed.), *The New Penguin Shakespeare: Macbeth* (London: Penguin Books, 1967), p. 16.
- 3 本稿での *Macbeth* の引用は全て、Kenneth Muir (ed.), *The Arden Shakespeare: Macbeth* (London: Methuen, 1951; rpt. 1997)を用いた。
- 4 Hunter, p. 145, notes, l. 15.
- 5 Cf. 拙論、「*Macbeth* における特異性」、『埼玉女子短期大学研究紀要』 第30号 (2014年8月)、p. 113。
- 6 Eugene M. Waith, “Manhood and Valor in Two Shakespearean Tragedies,” *ELH*, 17 (1950), pp. 262-68.

- 7 Cf. Marilyn French, “*Macbeth* and Masculine Values,” in *New Casebooks: Macbeth*, ed. Alan Sinfield (London: Macmillan, 1992), p. 17. Marilyn French は第1幕第7場の夫婦の会話を挙げて、*Macbeth* 夫人は男らしさを殺戮と同等視する見解から *Macbeth* と議論していると述べている。
- 8 R. J. Adam, “The Real *Macbeth*: King of Scots, 1040-1054”, *History Today*, 7 (1957), p. 382.
- 9 Cf. Geoffrey Bullough, (ed.) *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* (London: Routledge and Kegan Paul, 1973), VII, pp. 431-34; Adam, pp. 381-83; 拙論、p. 124。
- 10 Cf. Hunter, p. 156, notes. l. 115.
- 11 Nicholas Brooke (ed.), *The Oxford Shakespeare: Macbeth* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1990), p. 137, notes, l. 120.
- 12 拙論、p. 128。
- 13 Cf. Muir, pp. 92-93, notes. ll. 71-2; A. R. Braunmuller (ed.), *The New Cambridge Shakespeare: Macbeth* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1997), p. 196, notes. ll. 72-3. 鳶に食われた死者は蘇ってこないという迷信があるため。
- 14 拙論、pp. 121, 125-26。
- 15 Cf. Muir, p. 146, l. 29.
- 16 Muir, pp. xx-xxiii.
- 17 Cf. E. K. Chambers, *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1930), I, p. 271; Frank Kermode, “Antony and Cleopatra,” in *The Riverside Shakespeare*, ed. G. Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin, 1974), II, p. 1343; John Wilders (ed.), *The Arden Shakespeare: Antony and Cleopatra* (London: Routledge, 1995), p. 1.
- 18 Cf. Chambers, p. 270; E. A. J. Honigmann, “The Date of *Hamlet*,” *Shakespeare Survey*, 9 (1956), p. 32. 本稿での *Hamlet* の引用及び比較対照に関しては全て、Ann Thompson and Neil Taylor (eds.), *The Arden Shakespeare: Hamlet* (London: Thomson Leaning, 2006) を用いた。
- 19 Cf. Peter Stallybrass, “*Macbeth* and Witchcraft,” in *Focus on Macbeth*, ed. John Russell Brown (London: Routledge & Kegan Paul, 1982), p. 191; Henry N. Paul, *The Royal Play of Macbeth* (New York: Octagon Books, 1948), p. 7; 拙論、pp. 116-17。
- 20 近藤二郎、『エジプトの考古学』、(同成社、1997年)、pp. 96-98。
- 21 Wilders, p. 268. 本稿での *Antony and Cleopatra* の引用は全て、John Wilders (ed.), *The Arden Shakespeare: Antony and Cleopatra* (London: Routledge, 1995) を用いた。
- 22 Thompson and Taylor, pp. 457-58.